教員用資料：美術からみる　なごやのうつりかわり　指導のポイント、解説

【絵画作品】

**1）むかしのなごや（鶴舞公園）　について**

左）西村千太郎《虎の檻》 1935 年
右）市野長之介《公園の池（鶴舞公園
　　胡蝶ヶ池）》 1935年

鶴舞公園は 1909 年に名古屋市が作った公園第一号です。大須（のち上前津に移転）で私設動物苑を開いていた個人から動物を譲り受けて始まった鶴舞公園内の動物園（1918～1937）が、より広い土地を求めて東山へ移転したことは、市域の広がりや人々の生活の変化などと、ゆるやかにつながっています。

**《虎の檻》**は昭和 10（1935）年、今から 90 年前に描かれました。檻の格子に日の光があたるさまを、色をこまやかに変えて表したり、格子の影を檻の中に描いたり、画面の奥に白い帽子を被った人が柵にもたれて眺めている様子を捉えるなど、実際の風景を丁寧に見て写実的に描いています。

日本髪を結った着物姿の女性が、檻の中の虎を見ています。昭和初期（今から 90～100 年ぐらい前）までは、多くの女性が日本髪と着物で生活していました。洋服を着ていても家に帰ると着物に着替えることも多く、着物は普段着でした。現在は着物＝七五三や成人式、結婚式など特別なときに着るものというイメージが強いため、「動物園に着物で行ったの？」と奇妙に映るかもしれません。

日本髪は、性別や年齢、身分、家柄、既婚／未婚などでそれぞれ細かく定められ、個人の好みで自由に選ぶことはできませんでした。男性の断髪の普及に比べると、女性に髪型の自由が認められるまでには長い時間がかかっています。絵に描かれた髪型は銀杏返し（または唐人髷）で、未婚で若い女性と考えられます。

同じ年に制作された**《公園の池》**は鶴舞公園内にある胡蝶ヶ池とその周りの当時の風景を描いた絵です。木々の後方にある建物（聞天閣）は、公園のなかでも高台の吉田山（現在の野球場と鶴舞小学校のあたり）に建っており、貴賓館の役割を果たしていました。隣には鶴舞公園美術館がありましたが、聞天閣とともに昭和 17（1942）年に解体されています。池は今もありますが、周りの様子は時代とともに変わっています。

2）むかしのなごや（街のようす）について

左）喜多村麦子《暮れ行く堀川》 1929 年
右）西村千太郎《納屋橋風景》 1930 年

納屋橋は、名古屋の中心を東西に走る広小路通ぞいにあります。街が発展し、交通量が増えるのに伴い、江戸時代に木造で建てられた橋に代わり、石や鉄を使った近代的な橋が作られました。2 枚の絵は、日本画家と洋画家がそれぞれ納屋橋付近の景色を描いたものです。

**《暮れ行く堀川》**には、堀川に浮かぶ船と、川沿いに並び建つ倉庫群が描かれています。奥に見える洋風の橋の上を、人力車が走っていきます。絵のなかに垂直線をなす帆柱が印象的です。

堀川は自然にできた川ではなく、江戸時代に港だった宮の渡し（熱田区）と名古屋城を結ぶために作られた運河です。港で大きな貨物船から艀（はしけ）に荷物を乗せ換え、木材やお米、肥料など人々の生活にかかわる多くの物が堀川を通って運ばれました。

納屋橋は大正 2（1913）年に木造の橋から、石と鋼鉄を使った橋に架け替えられました。この作品が描かれた昭和 4（1929）年ごろ、すでに周囲の建物は近代化が進んでいたはずですが、作者の喜多村麦子は、かつての江戸の風情の残る納屋橋風景を懐かしんで、このような景色に仕上げたと考えられています。

**《納屋橋風景》**は昭和 5（1930）年に描かれました。高い塔や煙突のある洋風の建物がいくつも見えます。絵の右側に見える通りが広小路通、見える橋は納屋橋です。この上を歩行者や車だけでなく、多くのお客さんをのせた市電が走っていたはずですが、絵のなかには電柱すら立っていません。景色をヨーロッパの街並みのように見せたいと考えた画家が、あえて描かなかった（実際には見えているが省いた）可能性があります。

船の近くに見える人かげは、通勤している人たちでしょうか？川岸から階段を上がり、これから仕事場に向かうのかもしれません。今も堀川沿いを歩くと、建物の裏口からすぐ船に乗れるようになっていたり、通路が川に向かって下り坂になっている様子を見ることができます。

3)くらしの道具／家事のようす　について

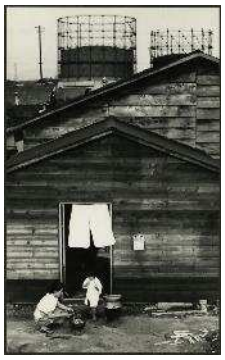
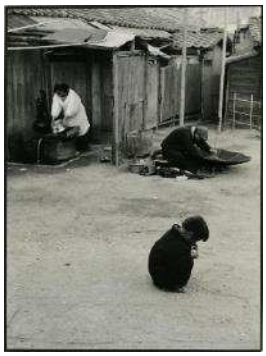
左)船橋治彦《[台所]》＊　1929 年
右)鬼頭鍋三郎《裁縫》 1939 年
＊正確な題名が分からず、美術館が便宜上つけた名称を[　]で囲んで示しています。

絵のなかに見られるくらしの道具や、それらを使っている人の様子を描いた作品を紹介しています。

《[台所]》は、絵の作者である船橋治彦の自宅または実家の台所と思われます。かまどに置かれた羽釜のほか、脚付きの木のまな板、家事をする女性の姿(着物の上にかっぽう着、下駄を履いて土間に立っている、など)、よく磨かれた土間の三和土(たたき)、棚に並べられた調理道具の様子などがくわしく丁寧に描かれています。
家事をする女性の左側、棚板の端にみえる金物の飾りは、とてもしゃれています。

《裁縫》で、ミシン台の前に座る女の人は、布に物差しをあてて長さを測っています。手に持っている白い布のほか、ミシン台にはピンクに白い水玉模様の布、黄色い布、黒い取っ手の裁ちばさみなどが見えます。
当時、できあがった洋服を売る店は限られていました。男性の仕事用の背広は体形を細かく採寸してオーダーメイドで作ってもらい、普段着る着物や女性や子どもの服は家で作りました。女性は花嫁修業の一つとして裁縫(和裁・洋裁)を習い、布団や浴衣など日常的に使うものを縫ったり繕ったりしました。洋服は、雑誌などを参考にしながら作っていたようです。
昭和の前半(1930年代)には国内でもミシンの生産が始まりますが、一般家庭に普及するのは戦後になってからです。くらしの道具のなかでも高級品のミシンを持つことは、一部の裕福な家庭に限られていました。
この絵は昭和14(1939)年に描かれました。洋服やスリッパなど身につける物のほか、ミシン台の奥に見える窓ガラスなど、洋風の生活様式を取り入れた室内であることがうかがえます。作者の鬼頭鍋三郎はこの時期、家事をする女の人をよく描いています。

【写真作品】
1)くらしの道具／家事のようす　について

左)臼井薫《夕餉の支度》1955 年
右)臼井薫《独りで遊ぶ》撮影年不詳

名古屋の写真家・臼井薫による写真集『戦後を生きた子供達 昭和 22 年－32 年』から、くらしの道具を使っている人々の生活風景を紹介します。

**《夕餉(ゆうげ)の支度》**は、守山区で撮影された写真です。木造の家の戸口近くで、女の人がしゃがんで夕飯の支度をしているのを、子どもが見ています。傍らにはふたをした羽釜が、薪のコンロの上にのっています。

名古屋市内で生活する人が増え、粗末な建材ながらも新築の家が建ちはじめたものの、水道・電気・ガスなどが完全に普及するまでは、昔と同じように薪を割って火をおこし、炊事をし、お風呂をわかしました。

後ろに見える筒状の建造物は、守山区に設置されたガスタンクです。今のガスタンクは球体ですが、古い型のタンクは円筒形をしています。生活をより豊かにする社会インフラと、その便利さが行き届く前の人々の暮らし、両方が一枚の写真に収まっています。

**《独りで遊ぶ》**は、名古屋市の隣、春日井市で撮ったことが分かっていますが、くわしい撮影年は不明です。地べたにしゃがんで何かしている子の左後方で、女の人がお米を研ぐのが見えます。水場(井戸)の上に屋根はありますが、周りの壁は一部しかありません。

水道が整備されるまでは、井戸から水をくみ上げて家事に利用していました。井戸は家の外(軒下)にあるため、野菜や米を洗う、洗濯するなどの作業は、井戸の近くでしていました。今のように温水が出ることもなく、寒い冬に外で水仕事をするのは大変だったでしょう。

その右隣りでは男の人が傘を逆さにして、修理か何か作業をしているようです。昼間は室内で電灯をつけるより、外の方が明るく作業に向いていたのかもしれません。

## 2）その他の写真作品について

体験学習室での学びとの直接のつながりは少ないものの、戦後の人々の生活の様子（衣・食・住および娯楽）を知ることのできる写真作品を紹介しています。大きく写った人物だけでなく、周りの様子にも注目してみてください。

いずれも名古屋の写真家・臼井薫の撮影によるものです。

●小さな弟、妹の世話をする子どもたちが防寒着である、ねんねこ半てんを着ています。昔はきょうだいの多い家庭が多く、今より多くの家事を手作業でしなくてはならなかったため、子どもが家の手伝いをすることは当たり前でした。弟や妹をおぶって、おつかいや遊びに行く子もいました。

●紙芝居は、テレビが登場するまで大切な娯楽の一つでした。紙芝居屋は自転車やオートバイの荷台に紙芝居用の枠（舞台）を取り付け、人の集まる広場や公園に移動しながら商売をしました。熱心に見入る人々のなかには子どもだけでなく大人も交じっており、服装からは、暑いときも寒いときも人々が紙芝居を楽しみにしていたことが分かります。

●学校、あるいは下校後に遊びに行った先からのかえり道の様子を写しています。子どもの持ちものや服装、周りの風景に注目し、児童に普段の「かえり道」と写真とを比べて、どんな違いがあるかを考えさせてみるのもよいでしょう。